けいおん！　－　もしも○○だったら　－

４－ＢＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　―　もしも○○だったら　―

【Ｎコード】
Ｎ３４８８Ｒ

【作者名】
４－ＢＵ

【あらすじ】
『けいおん！』の１番最初の物語『唯ちゃんが入学してクラブ活動を始めるまで』・・・この部分を『もしも○○だったら』と言う形で書かせて頂きました。　１話ずつの読み切りとなっていますが、基本的に『もしも』のお話なので、世界設定が全く違っていたり、キャラの事葉使い等が違っていたりします。　なので笑って許して下さる方のみお読みくださいませせ＾＾；

Ｋ－ＯＮ　かんおん！（前書き）

もしも『Ｋ－ＯＮ』が『軽音学部』の事ではなく『関西音楽部』の事だったら・・・

よくある「方言ネタ」です。
大阪弁も女事葉を使い、必要以上にキャラ崩壊はしないよう努力したつもりですけど・・・

先に謝っておきます、ごめんなさいｍ（＿）ｍ

K－ON　かんおん！

桜の花が舞い散る４月。
ここ岸和田女子高校は新入生へのクラブ勧誘でごったがえし、えらいことになってました。

律　「澪～！　はよ先生とこ行こ！」

澪　「ん？　なんでやのん？」

律　「なんでって『だんぢりクラブ』入るために決まってるやん！」

澪　「だんぢりクラブって・・・いつそんなん決めたん？　ウチ落研入ろ思てんのに」

律　「落研って・・・」

澪　「もう入部届けも書いて来てんねんから」

そうゆうて差し出した澪の入部届けを、律はひったくりビリビリにしてしもた。

澪　「あ～！　何すんのん！　もう使われへんやんそれ！」

律　「ええからええから、気にしたらあかんて」

律は強引に澪の手ぇを引っ張って職員室に連れて行ったんやけど・・・

先生「だんぢりクラブだんぢりクラブっと・・・ちょっと待っときや、今調べたるさかい・・・」

律　（ごっつい先生やなぁ・・・ほとんどヤ〇ザやん・・・まさかこの先生が顧問ちゃうやろね？）

澪　「・・・・・・・・・・・・・」

律　（うわぁ～、澪かたまってしもてるし）

先生「あ～！　せやせや！『だんぢりクラブ』は潰れてもぉてるわ！」

律　「つぶれてるて・・・何でですのん？」

先生「まぁ、正確にはつぶれかけっちゅう事やねんけど、今年の卒業式で部員がみんなおれへんようになってしもてなぁ」

澪　「ないんやったらしゃ～ないな、ウチは落研に・・・」

律　「ちょっと待ちぃや！　ないんやったら作ったらえぇだけやん！　今やったら私が部長やし！」

澪　「作るて・・・簡単にゆうけど2人で何が出来る思てんのん！」

律　「何って、あと2人集めたらえぇだけちゃうん？　簡単やん」

律のこうゆう強引なとこは、ええとこでもあり、あかんとこでもあった。
澪は幼馴染の律の性格をよぉ分かっとったから逆らうような事はせんと、諦めて体育館裏のだんぢり倉庫までついて行った。

倉庫の中を覗くと、そこには立派なだんぢりが置いてあり、2人はその迫力に思わず息をのんだ。

律　「うわぁ、凄いだんぢりやなぁ・・・」

澪　「うん・・・めっちゃ綺麗・・・」

律　「こんなええもんがあんのに、潰すのもったいないやん！」

澪　「・・・ウチもそう思う」

律　「そやろ？　頑張ってあと2人さがそ！」

それから数日間、2人はだんぢり倉庫に通いつめ新入部員が来るのを待っとった。

律　「暇やなぁ～・・・何か笑えるよぉな事ないのん？」

澪　「そんなん急にいわれたかってなんも思いつけへんわ・・・ま

ぁここにおっても時間もったいないし・・・しゃぁないからマクドでも行って何か食べよか？」

律　「そやね」

出掛けようかなぁと思ったら、不意に戸ぉが開いて一人の生徒がこっちをじ～～っと見て話しかけてきた。

紬　「あのぉ～、ちょっとえぇですか？」

澪　「え？　なに？　もしかして入部希望者なん？」

律　「入部希望？　ほんまに！」

紬　「えっと・・・『粉もんクラブ』の部室ってこの近くでおおてます？」

律　「（なんやのん、間違いなん？）・・・ちゃうちゃう！　ここは『だんぢりクラブ』！　粉もんクラブは確か調理実習室やったから、もっと向こうの方やよ」

澪　「ほんなら今日はもうウチ帰るわな」

大きなため息をついて澪が帰ろぉとしたら、後ろから律が大きな声をだして引き止めた。

律　「澪！　あんとき・・・あんとき言うたんは嘘やったんか！」

澪　「あんときって？」

律　「2人でだんぢり祭り見に行った時めっちゃ感動して・・・私が太鼓、あんたが鐘で、一緒に岸和田の街を爆走しよゆぅたやん！」

澪　「律・・・」

律　「そんで、もらうご祝儀は7：3って」

澪　「自分それ作り話入りすぎやって！」

澪はそうゆうと律の頭をひっぱたいた。

律　「いったぁ～！　なにすんのん！」

紬　「うふふふふふ・・・」

律　「？？」

紬　「おもしろい人らやね・・・屋根の上で踊る大工方くらいしかでけへんけど、それでもえぇのんやったら入らせてもらえますか？」

澪　「え？　ほんまに？　ほんまに入ってくれるのん？」

律　「や・・・やったぁ～！」

あと1人、あと1人入れたら『だんぢりクラブ』は潰れへん、律と澪はどぉやったらえぇのんか、必死のパッチで考えた。

その頃1年3組の教室では。

和　「唯、何さっきからため息ついてんのん？」

唯　「あ、和ちゃん・・・実はどのクラブに入ったらええのんか悩んでんの・・・」

和　「え～！　あんたまだクラブ決めてなかったん？　もう2週間もたってんのに何考えてんの！」

唯　「何考えてんの言われても・・・ウチ運動でけへんし、文化部って言うのもよぉ分かれへんし・・・」

和　「あぁ～あ・・・こうやってプーができるんやね」

唯　「クラブやってへんだけでプーって」

和　「何でもええけど、はよ決めなあかんよ」

唯　（せっかく高校生になってんから何かしたいけど・・・何やったらえぇんかなぁ）

翌日の教室、お昼休みにご飯を食べながら唯と和が話してた。

唯　「とりあえず『だんぢりクラブ』ってゆうとこに決めました」

和　「へぇ～、そこって何やってるとこなん？」

唯　「さぁ？」

和　「さぁってあんた・・・」

唯　「たぶん、だんぢり祭り見ながら屋台で美味しいもんいっぱい食べるんやと思うけど」

和　「なんやの、そのだらだらしたクラブ・・・」

2人は昼食を済ませると掲示板の勧誘ポスターを見に行った。

和　「ほら、ここに『一緒に岸和田の街を爆走しよう』って書いたぁるやん」

唯　「えぇ～・・・ウチ爆走する体力なんかあれへんし・・・」

和　「今からでも遅ないから、ちゃんと謝ってきぃ」

唯　「・・・うん・・・そうする」

放課後、唯はだんぢりクラブに謝りに行った。

唯　「ちゃんと間違いやったって言わな・・・しゃぁけどもし・・・」

【はぁ？　辞めたい？　おんどれ中々おもろい事言うやんけ！　そんなん言われてワシが簡単にハイ言うおもとんのか！　いっぺん死ぬかワレ！】

唯　「とか言われたらどうしよ・・・」

その時、ふいに唯の肩を叩くもんがおった。

唯　「ひぃいいぃ！　ちゃちゃ、ちゃいますちゃいます！　そんなんちゃいます！」

律　「あんた何やってんのん？・・・あ！　入部希望の平沢さんやね？」

だんぢり倉庫の前でオロオロしてる唯の手ぇを引いて律は勢いよぉ倉庫に入っていった。

律　「待望の新入部員やよ～！」

唯　（あぁ・・・はよゆわな・・・退部するってゆわな）

律　「だんぢり祭りはえぇよ～！　休憩所でジューズとか飲み放題

やしぃ」

澪　「他にえぇとこいっぱいあるやろ！　何で強調するとこがそこやのん！」

唯　（え？　ジュース飲み放題なん？　やめんのやめよかな・・・）

澪　「なぁ、平沢さんは何処のだんぢり祭りよぉ見に行くのん？」

律　「そんなん岸和田に決まってるやん」

唯　（ちゃんと退部届けも書いて来てんねんから、はよゆわな・・・）

紬　「もしかしたら貝塚とか泉佐野に行ってんのかもしれへんやんねぇ♪」

澪　「そうなん？」

唯　「あの・・・その・・・た、たた」

律　「田尻町？　えらいまた渋いとこ行くんやね」

唯　「そうちゃうんです！　今日は退部届け出しに来たんです」

紬　「え！・・・なんで？・・・」

律　「退部って・・・このお菓子あげるから、そんな事言わんとい
て」

澪　「お菓子て、あんたそれ食べさしやん！　あげんねんやったらちゃんとさらっぴんあげ！」

唯　「ほんまにごめんなさい・・・軽い気持ちで入るってゆうてしもたから・・・ウチ・・・ウチもうどうしたらえぇのんか分かれへん」

唯はえぇかげんな事をゆうた自分が情けのぉなって涙がとまれへんかった。

律　「ううん・・・私らの方こそ無理に引きとめよ思てごめん・・・」

澪　「平沢さん、別に入らんでえぇから祭囃子だけでも聞いていってくれへん？」

唯　「え！　聞かせてくれますのん？」

律と澪はだんぢりに乗り込み太鼓と鐘の前に座り、紬は屋根の上で踊る準備をした。

コ～ンコ～ン・コンチキチン・チキチン・チキチンコンコン♪
チキチン・チキチン・チキチンコンコン♪

軽快な音楽は倉庫中に響き渡り、楽しい時間が過ぎていった。

律　「どうやった？　私らの演奏」

唯　「なんてゆうか・・・はっきりとはゆわれへんけど・・・あんまりうまないですね！」

律　「えげつなぁ～！」

唯　「でも、めっちゃ楽しそう！　ウチこのクラブに入ります！」

澪　「ほ・・・ほんまに？！」

紬　「やったぁ～！　みんなでだんぢりクラブを続けられるんやね！」

律　「よっしゃ！　記念写真や！」

新しくやりたい事を見つけた唯。
これからは夢にむかって楽しい高校生活を送る事やと思います。

律　「よ～し！　夢は『祇園祭乱入』や～！」

一同「お～～～！」

―　　―　めでたしめでたし

K－ON　かんおん！（後書き）

有名な大阪弁で『おまけ』を・・・

律「なぁ澪、あっちから来んのんチャウチャウちゃう？」

澪「え？　よぉ見えへんけどチャウチャウちゃうんちゃう？」

律「似てるけどチャウチャウちゃうんかなぁ？」

澪「ほら、やっぱりチャウチャウちゃうやん」

律「ほんまや、チャウチャウちゃうかったわ」

って、関西以外の方にどこまで分かるのかしらw

Ｏ－ＫＮ　おかけん！（前書き）

もしも唯ちゃんが最初に見たのが『オカルト研究会』の勧誘ポスターだったら・・・

オカルト研の２人は名前の設定が無かったので、中の人の名前を使わせていただきました。

ちなみに向かって左の麻呂眉毛の子が『杉浦奈保子』ちゃん
右のおかっぱ頭の子が『那瀬ひとみ』ちゃんとなります。

キャラの性格の方は・・・
私のオリジナル要素高めです・・・

Ｏ－ＫＮ　おかけん！

桜舞い散る４月のとある日。
ここ、桜ヶ丘高校では入学して間もない１年生が激しいクラブ勧誘を受けていた。

奈　「ねぇひとみ、どのクラブに入るか決めた？」

ひ　「中学の時と同じで、オカルト研究会があれば入るけど」

奈　「オカルト研かぁ・・・中学の時は面白かったよね」

ひ　「また不思議な事をいっぱい研究したいよね・・・そうだ、当然奈保子も入るんでしょ？」

奈　「当たり前じゃない、また３年間宜しくね」

ひ　「こちらこそ」

－　職員室　－

先生「え～っと、ちょっと待っててね今調べてあげるから・・・アカルト研、オカルト研っと・・・」

奈　（神秘的な先生・・・この人が顧問なのかしら？）

先生「あら・・・オカルト研は廃部になってるわね」

奈　「廃部?！」

先生「正確には廃部寸前ってとこかしら?　今年の卒業式で部員が全員居なくなっちゃったのよ」

奈　「部員が何人居れば廃部を免れるんです?」

先生「そうね、今月中に4人集まればクラブとして申請できるし部費も貰えるけど」

奈　「集まらなかったら廃部・・・ですか・・・」

先生「どうしてもやりたいんだったら部費は貰えないけど『同好会』って形でなら出来るわよ」

奈　「そうですか・・・分かりました!　私、同好会でもいいのでやります!」

先生「そう、頑張ってね杉浦さん」

2人は誰も居ないオカルト研の部室へと向かい、どうやって部員を勧誘するか話し合った。

ひ　「ねぇ、奈保子・・・何かいいアイデアある?」

奈　「ん～・・・今のところ何も思いつかないけど、そんなに焦る

必要もないじゃない？」

ひ　「え？　どうして？」

奈　「さっき先生も言ってたけど、最悪の場合でも同好会としてこの部屋も使える訳だし、別に部費が貰えなくても2人で楽しくやればいいじゃない」

ひ　「そっか・・・そうだよね」

こうして新たな部員を募集しながら、2人の『オカルト研究会』は始まりました。

その頃、1年3組の教室では。

和　「どうしたのよ唯、さっきから難しい顔をして？」

唯　「あ、和ちゃん・・・実はどのクラブに入るか悩んでて・・・」

和　「え！　あなたまだ決めてなかったの？！」

唯　「だってだって・・・私ってば運動できないし、文化部もよく分かんないし」

和　「はぁ・・・こうしてニートが出来上がっていくのね」

唯　「そんなぁ、クラブやってないだけでニートって」

和　「とりあえず掲示板に色んなクラブ紹介のポスターが貼ってあるから見てきたら？」

唯　「うん・・・放課後見てくる」

唯と和の会話を近くで見ていたオカルト研の2人はお互い顔を見合わせた。

ひ　「ねぇ奈保子、今の子・・・」

奈　「うん・・・ひとみも同じ事を思いついたみたいね」

ひ　「あの子だったらポ～っとしてるから簡単に勧誘できるわよ」

奈　「放課後までに何か魅力的なポスター作って貼りに行きましょ」

ひ　「でも何を書けばいいのかしら？」

奈　「さっきの様子だったら難しい内容よりも『美味しいお菓子あります』とかの方がいいんじゃない？」

ひ　「そうね、部室にさえ来てもらえたら・・・」

奈　「うん・・・いざとなったらあの方法で・・・」

ひ　「うふふふふ・・・」

―　次の日のお昼休み　―

唯　「とりあえず『オカルト研』って所に決めました！」

和　「へぇ～、で、そこってどんな事するの？」

唯　「さぁ？」

和　「さぁって！」

唯　「でもでも『美味しいお菓子を一緒に食べませんか？』って書いてたから、きっと毎日楽しい事ばかりするんだと思うよ」

和　「何よその怪しい誘い文句は・・・他の部分もちゃんと見た？」

和に注意されて、２人は一緒に勧誘ポスターを見に行った。

和　「ほら、ちゃんと『不思議な事を研究しましょう』って書いてるじゃないの」

唯　「どうしよう・・・私不思議な事なんて何もわかんないよぉ」

和　「ある意味、唯が１番不思議な存在なんだけどね」

唯　「酷いよ和ちゃん！」

和　「今のは冗談だけど、それより先生に入部届けを出しちゃった

んだから、放課後はきちんと部室に顔を出して、どんな事をするのか自分の目で確認しなきゃだめよ」

唯　「・・・うん・・・わかった」

和　「それでもし自分には合ってないって思ったら、素直に謝って入部を取り消してもらいなさい」

放課後、唯はオカルト研のある建物へと向かった。
そこは一般の授業を受ける教室は無く、音楽や理科の特別教室と文化部の部室があるだけなので静かな独特の雰囲気が漂っていた。

唯　（なんだか怖いなぁ・・・でもここを通らないとオカルト研に行けないし・・・）

廊下の中ほどまで来ると扉に『オカルト研究会』の文字と、その下に『ＵＦＯに連れ去られる牛』の描かれたポスターが貼ってある教室を見つけた。

唯　「おじゃましま～す・・・入部希望で来たんですけどぉ・・・」

奈　「あ、平沢さんですね・・・どうぞ中に入ってください」

ひ　「今ちょうどお菓子の用意をしてたところだったんですよ」

唯　「え！　お菓子！」

奈　「一緒に食べながらお話しましょ」

唯　（ほえ～・・・やっぱりこのクラブでいいかも）

3人はお菓子を食べながらオカルトについて色々と話をして過ごしました。

唯　「ところで奈保子ちゃん」

奈　「何？」

唯　「ここの扉に貼ってた『牛さんが空中に浮いてる絵』って何なの？」

奈　「あれは『キャトルミューティレーション』って言って宇宙人が地球の生物を調べる為に、連れ去ろうとしてる様子を描いたものなの」

唯　「え～！　宇宙人ってそんな事してるの？！」

ひ　「牛や馬が多いみたいだけど、人間も何人かは連れ去られてるみたいよ」

唯　「それって怖いよね・・・でもニュースとかであんまり言わないのはどうしてなんだろ？」

ひ　「それは連れ去られた人間は洗脳されたり記憶を消されたりし

てるからよ」

唯　「記憶を消したり操作したりって・・・宇宙人って凄い技術をもってるんだね」

奈　「洗脳ってそんなに難しい技術じゃないわよ」

ひ　「うふふふ・・・」

唯　「え？・・・」

奈　「やろうと思えば私にだって出来るし」

唯　「そ・・・そうなんだ・・・」

部室内の空気が一瞬にして変った・・・
それはノンビリしている唯でも気が付き、危険を感じるほどに・・・

唯　「えっと・・・私やっぱりオカルトって知識も何もないし・・・その・・・」

奈　「どうしたの平沢さん？　知識がなくても私達が1から教えてあげるし」

ひ　「そうよ、一緒にやりましょうよ」

唯　「その・・・ご、ごめんなさい！　今日はとりあえず帰ります」

ひ　「奈保子！　逃がしちゃダメ！」

唯　「いやぁ！　離して！」

奈　「キャトって洗脳するのよ！」

唯　「和ちゃん助けて！　いやぁあ！　憂～！」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・」

「・・・」

・　・　・　・　・　・

―　翌日の通学路にて　―

和　「おはよう唯、こんなに早く起きてるなんて珍しいわね」

唯　「オハヨウ・ノドカチャン」

和　「昨日はオカルト研に行ったんでしょ？　どうだった？」

唯　「タノシカッタカラ・ワタシ・ハイルコトニシタ」

和　「そう、唯も楽しめる事が見つかったのね、良かったわ」

唯　「コレカラ・オカルトケンデガンバルネ」

和　「それじゃ私は生徒会室に行くから、唯も頑張ってね」

唯　「ウン」

こうして唯のオカルト研での3年間が始まったのでした。

―　メデタシ・

メデタシ　―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3488r/

けいおん！　－　もしも○○だったら　－

2011年10月8日08時27分発行